

日本語の再帰代名詞「自分」の先行詞の決定条件

生田 奈穂[†] 吉本 啓[‡]

東北大学大学院国際文化研究科

[†]ikuta@insc.tohoku.ac.jp [‡]kei@tiger.intcul.tohoku.ac.jp

1. はじめに

本稿では、照応表現である「自分」の先行詞がどのように決定されるのかについて考察する。Head-Driven Phrase Structure Grammar (Pollard and Sag 1994) を用いた Iida(1996)の枠組みを拡張し、Momoi(1985)の semantic role hierarchy を導入することによって、「自分」の束縛メカニズムを提案する。

2. 先行研究とその問題点

2.1 標準束縛理論による分析

標準束縛理論(Chomsky 1981)によると、全ての NP は次の三つのタイプのうちのどれかに分類される。

- (1) a. anaphors (照応表現)
- b. pronominals (代名詞)
- c. referential - expressions (指示表現)

これら三つのタイプの分布は(2)の束縛条件によって制限されると仮定している。

- (2) a. Condition A: 照応表現はその局所領域内で束縛されなくてはならない。
- b. Condition B: 代名詞はその局所領域内で自由である。
- c. Condition C: 指示表現は自由でなければならない。

また、標準束縛理論のもとでは、 α は次の場合に、かつ次の場合のみ β によって束縛される。

- (3) a. α と β が同一指標を持つ。
 - b. β が α をc-統御する。
 - c. β がA位置にある。
- その他の場合は α は自由である。

「自分」が局所的な束縛だけではなく長距離束

縛をも許すという事実は標準束縛理論にとっては解決の難しい問題である。「自分」が局所的に束縛される可能性は「自分」が Condition A に従うことを示しており、照応表現として分類されるべきであるといえる。一方で長距離束縛の可能性は「自分」が Condition B に従い、代名詞として分類されるべきであることを示しているといえる。標準束縛理論ではこの「自分」の逆説的な性質を十分に説明することができない。

2.2 Disjunctive Theory

先行研究の多くは、「自分」の束縛は「disjunctive」なアプローチで説明されてきた。disjunctive なアプローチとは、次の二つの束縛のメカニズムが別々に仮定されていることを指す。一つ目は統語的な束縛のメカニズムのことで、このメカニズムでは常に主語を「自分」の先行詞としてとる。二つ目は談話に関する束縛のメカニズムで、このメカニズムではある談話の概念に基づいて通常主語以外を先行詞として決定する。この disjunctive theory の例として Kameyama(1985)が挙げられる。しかし、Iida(1996)はこのような disjunctive theory は文中に複数の「自分」が現れる場合に誤った予測をすると論じている。もし、syntactic binding と discourse binding という二つの独立したメカニズムが存在するのならば、二つの「自分」が別々の束縛のメカニズムによって許可された別々の先行詞をとることを阻止するものは何もない。

2.3 久野(1978)の共感度分析

久野(1978)は描写されている状況を見る方法は共感の概念によって決定されると想定し、話者が視点を置こうとしている人間に共感していることが必要である。しかしこの分析では(4)の

ように「くれる」を含む文に関して問題を引き起こす。

(4) 花子_iは好子に自分_jについて何も語ってくれなかった。

(4)で動詞「くれる」の使用は、話者が主語以外の個体に自分を同一視していることを示す。久野(1978)の共感の分析では、「自分」が先行詞として(4)の場合は「好子」をとると予想されてしまう。

2.4 Katagiri (1991) の分析

Katagiri(1991)は「自分」の先行詞決定に関して *indexical perspective* 及び *inferential perspective* という二つの概念を用いたモデルを提案している。しかし、Katagiri(1991)のモデルは「自分」の先行詞が Agent 又は Experiencer であるという前提に基づいており、(5)のように先行詞がこの二つの意味役割以外の例を説明することができない。

(5)では先行詞「花子」は Source である。

(5) 花子_iから太郎への自分_jのことについての手紙

3. 本モデルの枠組み

3.1 統語上の制限

2.2節で指摘した *disjunctive theory* の問題点を克服するために、統語上の制限と意味上の制限を併せて使うことにより、「自分」の先行詞を決定する。

統語的な制限の基本的な考え方となる *o-command* (Pollard and Sag 1994) の概念は次のように規定される。

(6) *o-command* : Y が Z を支配する X より斜格性が低いとき、かつその時にかぎり Y は Z を *o-command* する。X = Z の場合は Y は Z を局所的に *o-command* する。

(6)において斜格性とは、文法関係の階層性の中で、斜格性の最も低いものが主格、次が対格、その次が与格である。その他は斜格として最も斜格性が高くなる。

Lida(1996)は「自分」に関する統語的な制限は(7)のように述べられるべきであると論じている。

(7)「自分」はその先行詞を *o-command* しない。

(7)によって(8)のような例が排除される。

(8) *自分が太郎を苦しめている。(Lida 1996)

しかし(7)のような弱い条件の下では(9)において、「母」以外に「娘」も先行詞として取ることが可能になる。

(9) 母_iは娘を自分_jに引き寄せた。

したがって(7)とともに使われる意味上の制限が必要である。

3.2 Perspective の導入

Lida(1996)では、*perspective* という概念が意味条件として用いられている。話者は特定の視点からイベントを表現する。話者が視点を置こうとしている個体が *perspective* を持つ個体であり、*perspective* を持つ個体が「自分」の先行詞として理解される。この *perspective* を持つ個体は、Lida(1996)によれば *default* では話者が主語であるという。ただし、Lida(1996)は「自分」の先行詞は文中の要素であるという制限があるので、*default* では主語であると述べている。また、*perspective* が主語以外のときは話者がその個体と自分を同一視しなければならないと述べている。しかし、同一視しているかどうかは具体的にどのようにして分かるのか。どのような場合に話者は主語以外の個体と自分を同一視するのであろうか。*perspective* は非常に有効な概念であるが、Lida(1996)では *perspective* が誰にあるかを決定するためのプロセスが全く示されていない。

加えて、(4)のような「くれる」を含む文に関しては、久野(1978)の分析と違って「自分」が主語である「太郎」に束縛されることを予測することも可能であるが、同時に「自分」が主語ではない項に束縛されることが可能になってしまう。

3.3 Semantic Role Hierarchy の導入

本論では *Perspective* の値を決定するための条

件が明確ではないという Iida(1996)の問題点を克服するために Momoi(1985)の semantic role hierarchy を用いる。

Momoi(1985)は自分の先行詞の決定に関して次のようなハイエラキーがあると述べている。

- (10) Experiencer \geq Agent > Patient > Others (Goal, Source ?, etc)

Iida(1996)で説明できなかった(4)に対しては「花子」に Agent が割り当てられ、(11)の階層に基づき、「花子」が先行詞であると決定できる。

本稿では意味役割を Dowty(1989)の分類に沿って定め、(11)のハイエラキーを用いる。

- (11) Experiencer \geq Agent > Patient > Others (Goal, Source, Theme)

4. 「自分」の束縛メカニズム

本論では「自分」の束縛メカニズムを提案する。Iida(1996)の枠組みを拡張し、Momoi(1985)の semantic role hierarchy を導入することによって、perspective を持つ個体をより明確に決定することができる。また同時に(4)のような例文に対しても先行詞を正しく予測することができる。

「自分」の先行詞決定の手順を 1 から 4 のように定式化する。

- (12) 1. 「自分」はその先行詞を o-command しないという統語的な制約によって、(8)のような例が排除される。

2. 1.の制限を通った文に対して次のような先行詞決定のためのメカニズムが働く。まず、文中に含まれる個体に semantic role が割り当てられる。PERSPECTIVE の値は CONTENT に含まれる semantic role のうち、ハイエラキーの最も高いものと一致しなければならないと仮定する。そしてこの仮定に基づいて get-appropriate -perspective という関数によって PERSPECTIVE の値 \boxed{x} が決定される。get-appropriate-perspective は(13)のように定義する。

3. PERSPECTIVE の値と ARG-ST 上の \boxed{y} NP:ana の指標は単一化するという規則を「自分」を有する文に対して仮定する。そしてこの規則によって PERSPECTIVE の値 \boxed{x} と ARG-ST の \boxed{y} NP:ana の指標が単一化し、 \boxed{y} NP:ana \boxed{x} となる。

4. CONTENT のなかで属性である semantic role に与えられる値と ARG-ST 上の NP の指標は単一化するという規則によって「自分」に割り当てられた semantic role が \boxed{y} NP:ana の指標である \boxed{x} を値としてとる。

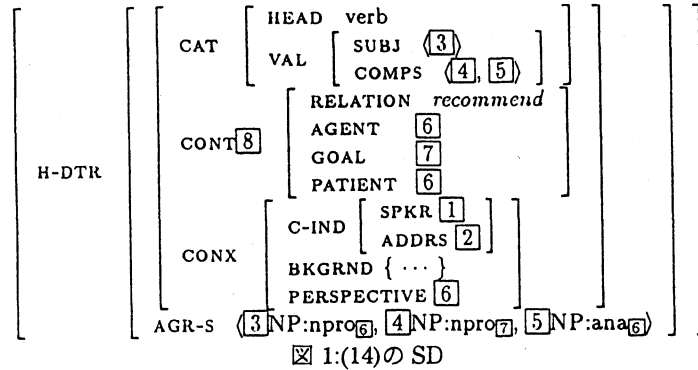
(13) Definition: get-appropriate-

perspective(\boxed{z}) = $\boxed{1}$

If $\boxed{z} \equiv \boxed{1}$ sem-role \wedge $\boxed{2}$ sem-role $\wedge \dots \wedge \boxed{n}$ sem-role and higher-sem-role($\boxed{1}, \boxed{2}$) \wedge higher-sem-role($\boxed{1}, \boxed{3}$) $\wedge \dots \wedge$ higher-sem-role($\boxed{1}, \boxed{n}$)

Definition: higher-sem-role ($\boxed{\alpha}, \boxed{\beta}$)

If ($\boxed{\alpha} =$ experiencer-role \wedge $\boxed{\beta} =$ patient-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ experiencer-role \wedge $\boxed{\beta} =$ theme-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ experiencer-rol \wedge $\boxed{\beta} =$ source-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ experiencer-role \wedge $\boxed{\beta} =$ goal-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ agent-role \wedge $\boxed{\beta} =$ patient-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ agent-role \wedge $\boxed{\beta} =$ theme-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ agent-role \wedge $\boxed{\beta} =$ source-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ agent-role \wedge $\boxed{\beta} =$ goal-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ patient-role \wedge $\boxed{\beta} =$ theme-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ patient-role \wedge $\boxed{\beta} =$ source-role) \vee ($\boxed{\alpha} =$ patient-role \wedge $\boxed{\beta} =$ goal-role)



具体例を挙げて説明する。本稿では (14) に対して図 1 のような SD (Structural Description) を与える。

(14) 太郎は花子に自分を推薦した。

図 1 の SD が作られる手順を (15) に示す。

(15) Conditions: get-appropriate-perspective ([8])
= [6]

関数 get-appropriate-perspective によって [8] の中から [6] が選ばれ、PERSPECTIVE の値として決定する。

2. PERSPECTIVE の値と ARG-ST 上の NP:ana の指標は単一化するという規則によって、[5] NP:ana に [6] が与えられる。
3. CONTENT の中で PATIENT がとる値が [5] NP:ana に与えられている指標である [6] と単一化する。

5. おわりに

本稿では「自分」の束縛メカニズムを提案した。具体的には Iida(1996) の枠組みを拡張し Momoi(1985) の semantic role hierarchy を導入することによって、perspective を決定する条件が明確ではないという Iida(1996) の問題点を克服し、「自分」の先行詞決定のプロセスを定式化することができた。加えて (4) のように Iida(1996) では正確に先行詞を予測できなかった例に対しても適切な先行詞を決定することが可能になっ

た。今後は「自分」以外の再帰代名詞も扱えるようモデルを拡張していく予定である。

参考文献

- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Dowty, D. 1989. On the Semantic Content of the Notion of "Thematic Roll". G. Chierchia, B. H. Partee, and R. Turner. eds. *Properties, Types and Meaning*. 69-129. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Iida, M. 1996. *Context and Binding in Japanese*. Stanford: CSLI.
- Kameyama, M. 1985. *Zero Anaphora: The Case of Japanese*. Doctoral dissertation, Stanford University.
- Katagiri, Y. 1991. Perspectivity and the Japanese Reflexive "zibun". J. Barwise, J.M. Gawron, G. Plotkin, and S. Tutiya. eds. *Situation Theory and Its Applications*. 425-447.
- 久野 暁. 1978. 談話の文法. 東京: 大修館書店
- Momoi, K. 1985. *Semantic Roles, Variation, and the Japanese Reflexives*. J. Cassell, and R. Chametzky, et al. *University of Chicago Working Papers in Linguistics Volume 1*.
- Pollard, C. and Sag, I. A. 1994. *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. Chicago: University of Chicago and CSLI Publications.